参考資料 No. 2

平成 27 年 3 月 19 日
国立情報学研究所
学術コンテンツ課

SPARC Japan の今後の活動方針（意見シートのまとめ）について

1．第 4 期までの活動、および、第 5 期の基本方針についてのご意見

第 4 期までの活動について	
逸村委員	いろいろな活動を繰り広げてきたと感じます。 日本の数少ない拠点ですので、頑張るしかない、と感じています。
今井委員	学会関係で出席させて頂いている観点からは、日本の情報系学会の国際学術情報流通に対する取組みに忸怩たる思いもあるところですが、一方で学会員の大半（サイレントマジョリティ）は図書館で論文を閲覧し、自分の研究論文が学会論文誌に発表できればよい、という受益者の立場に甘んじている点があるように思います。(大学に戻り、末端ですが図書館関係の委員をしておりますと、なお一層その甘さを痛感します。）昨年までの話となりますが、応用物理学会の 2 論文誌が 2014 年 1 月より IOP から出版されている点、1 年が経過したところでその効果等も知りたいように思います。ということで、自分自身は上述のように忸怩たる思いをもつばかりで役に立たず恐縮ですが、「学会における学術情報発信」について、SPARC Japan の活動で取り上げて頂く等、検討いただけると幸いです。(本来は学会が SPARC Japan に依頼し、当該学会大会などで企画セッションを開催する等の取組みを行うのが筋のようにも思えますが)。（上記 1.　セミナー案　#下記引用あり） 初期の学協会等とタイトに連携していた活動について、その活動が当初目的をほぼ達成し、学協会等への支援は科学研究費研究成果公開促進費国際情報発信等で行われるということで終結している点を踏まえ、現在の活動方針へと移行してきた点については、まさしく正しい選択であったと思っております。 一方で、残念ながら各学協会が自分自身のリーダシップの下で学術情報発信を行っていくという点について、横の連携を図る場は日本学術会議等が中心になっており、そこでの連携活動も非常に活性化しているとまでは言い難い現状であることを認識すると、1 つの可能性として上記 1 の項に書きましたようなセミナーの発展系を模索することはありえるのかもしれません。 たまたまですが、今井の所属する電子情報通信学会の基礎・境界ソサイエティにおいても、学会発の学術情報発信について取組みはしているものの、十分な成果があげられているとは言えない状況で、上記 1 の項にもある忸怩たる思いを抱きつつの活動となっています。その点、皆様ご存知かもしれませんが、京都大学図書館機構長でもあり、電子情報通信学会基礎・境界ソサイエティの前会長でもある引原先生の書かれた原稿にも記述されております。 引原 隆士: 学術研究成果のジャーナル出版とオープン化. 電子情報通信学会 基礎・境界ソサイエティ IEICE Fundamentals Review, Vol. 8, No. 2 (2014), pp.

	72-74. DOI: 10.1587/essfr.8.72 にありますように、日本の各研究コミュニティがどういう戦略をとるかについての、基礎となる情報を提供する役割を担うという案もあるかもしれません。（これは本来各コミュニティが自ら努力して収集すべき情報であることは重々承知しておりますが。） 基本方針等について言及させていただくというよりは、自分の周辺で行われている学会取組みの限界を記述させて頂くのみになってしまっているかもしれませんが、コメントまで。
森　委員	OA について： OA ジャーナルは学術出版の業界に大きな影響を及ぼしているが、特に数学のような大きな資金が動かない分野では、その行方は見通せない。一言で OA ジャーナルと言っても世界ではそのレベルは様々である。例えば、数学では国際的に Embargo5 年というのも一つの OA スタイルとして定着している。日本が学協会による国際情報発信を振興するには、OA の多様化をめざし様々な OA をサポートするべきだと考えます。 学協会による学術出版について： SPARCJAPAN が国際情報発信を振興することを目的にして開始されたが、数学においては順調に成果が上がっている。それにしても、以下に見るように非常に時間がかかります。 第 2 期　2006 年度～2008 年度 　2007 年度　日本の多くの数学学術誌が Euclid が契約。 第 3 期　2010 年度～2012 年度 　日本の出版業界の変化の影響を受けて、日本の数学学術誌が出版形態を変更した。PRIMS と EMS の契約。例えば、NMJ は Euclid/Duke と契約し、PRIMS は EMSph と契約した。 第 4 期　2013 年度～2015 年度 　2014 年に NMJ は CUP と 2016 年から開始する契約を結びました。NMJ は CUP から支払を受けて自立した出版を継続予定。 例えば、数学学術誌に関しては、SPARCJAPAN の成果はこのように上がってきているが、成果を確実なものにするには、息長く、学術誌の連携を司る役目は継続するのが望ましい。しかし、現状ではそれを行っていないと感じます。（上欄のセミナーという形式には限らないが、連絡会のようなものを企画するのも一つの方法かと思います。）数学分野でのことしかわからないので、数学について書きましたが、他分野でも似た事情があるのではないかと拝察しますので、御検討をお願いいたします。
土屋委員	・当初、学会誌の電子化、自立を財政的に支援することによる日本の学術情報流通の健全化を志向したが、その方向で一部学会における改善を促し、具体的な国際連携も実現したものの、学会出版の体質は変わらなかったといってよいので、かなら

	ずしもいちじるしい成果があがったとはいえない。 ・SPARC の動向がオープンアクセスアドボカシーを中心とするようになったことを踏まえたセミナー開催活動では、図書館関係者、出版関係者の関心を引き、関係者に裨益する活動は一定程度の成果のある情報提供、意見交換の場を提供できている。 ・とくに海外からの招へいを含んだ企画において、メガジャーナルへの動向、オープンアクセスの商業化、SCOAP[3] の考え方などの展開を認識することが可能となるなど、適切な人選があった場合には予想を越えた成果を上げた。 ・しかし、セミナー企画の一貫性はかならずしもわかりやすくなく、「場当たり」的といってもよい状況にある。
倉田委員	第 4 期までの活動についての意見というのは、もっとこういう活動が必要だったとか、これまでの活動の評価とかいうことでしょうか。一貫してオープンアクセス支援活動を続けてきたことには意義があるし、DRF のような図書館員コミュニティが活動を続けていることはよいことだと思います。
関　委員	実質的な部分で大学側の対応はなかなか進まない状況ですが、個々の課題に対する問題認識を定着させるという点で SPARC Japan の活動は重要な役割を果たしてきていると思います。27 年度の活動計画(案)について特に異論はございません。
関川委員	SCOAP[3] や arXiv といった活動は、わが国のオープンアクセス活動のパイロット事例として有意義であり、NII が中心となって国内のとりまとめ、海外との窓口を担当していることは、重要であると考えています。 わが国の場合、さまざまな理由からこういったオープンアクセス活動の中心を担う大学・機関があらわれにくいことから、NII の取り組みはたいへん評価すべきと思います。難しい点もあるかと思いますが、今後も積極的に取り組んでいかれることを要望します。
第 5 期の基本方針について	
土屋委員	・CSTI レベルでオープンサイエンスが議論されたことによって、研究成果へのオープンアクセス、イノベーションの基盤となるかもしれないオープンデータ、加えて高等教育の基本的構成要素の再考を迫るオープンエデュケーションなどへの関心が高まりつつも、それらの背景、動向に関する十分かつ適時な情報提供は行なわれていない。 ・しかし、以上に述べたように SPARC Japan 企画のセミナーは、オープンアクセスの動向等に関して適時の情報提供を実現してきている側面がある。 ・したがって、この実績を生かして、これからも「セミナー業」に徹するべきである。 ・しかし、企画の一貫性を実現することによって、結果としてそれなりのすくなくともジャーナリスティックな調査研究に相当する成果を上げることができることが期待されるので、5 名程度からなる年間計画検討グループ(たとえば、IR 推進委員会、JUSTICE、国公私立大学図書館協力委員会著作権検討委員会、商業出版者、学会出版者、いわゆる研究者各 1 名)を発足させ、1 ヶ月以内に検討して年度内の計

	画(誰に話しもらうかということではなく、どのようなひとつのテーマを年度内でカバーするかを決めるという意味の計画)を明らかにして、それをもとに具体化するというような手法が考えられる。 ・ＮＩＩが SPARC Japan の名前を使ってオープンアクセスを推進する事業、取り組みを行なうことについては、運営委員会としては盲判を押せばよい。
倉田委員	第 5 期に向けて、研究データの管理にまで踏み込むのかに関しては、もう少し戦略が必要な気がします。今の日本の大学図書館において、STM 分野のデータ管理を行えと言っても、無理ではないかと思います。もちろん、先進的にできる可能性のあるところを探るという方法はあるかもしれませんが、機関リポジトリの経験や実績では弱いと思います。 これまで図書館がやってきたこととの類似性、親和性という意味では、デジタルテキストの管理の方がやりやすいということはないのでしょうか。あまり新規性がないというか、アピールがないということはあると思うのですが、デジタルアーカイブをきちっと管理、運用するというのは必要だと思いますが。デジタルヒューマニティーズの研究拠点になる大学図書館がでてくれば、意義はあることだとは思います。 今後の方向性という意味では、データ管理計画について図書館員がちゃんとアドバイスできるように、そういう勉強をすることや、研修プログラム、チュートリアルという支援は意味があるとは思いますが、現在の図書館員の意識では、かなりかけ離れたという認識になるのではないかとは思います。
野崎委員	各大学・研究機関の研究戦略を考える上で，図書館のような組織がデータを集め分析することが必要かと思います。技術的にはオープンアクセスにより容易になるのではないかと思います。図書館の将来像を引き続き議論してはいかがでしょうか。
関川委員	オープンアクセス化やオープンデータ化といった活動は、大学図書館や図書館職員だけでは限界があり、研究者や行政と連携しなくては大きな進展が望めなくなりつつあるかと思います。これまで以上にこれらの関係者を巻き込んだ活動が必要かと思います。
林　委員	オープンアクセスからオープンサイエンスに SPARC がどう向き合うか